



# 彼女とメール



有坂信一郎

○夕暮れの港

波止場に立ち夕日を見つめている彼女と彼氏。彼氏の唇を避けるようにうつむく彼女。

彼女「しばらく、会えないかも」

そう呟く彼女の言葉に不満の声をあげる彼氏。

彼氏「えー、なんで？どうしてよ？」

彼女「忙しくなりそうなのよ」

彼氏「忙しくたって頑張って時間作れば会えないことはないじゃん」

彼女は黙って辛そうな面持ち。彼氏はそれ以上の追及をあきらめる。

彼氏「分かったよ——でも、たまにはメールくらいくれよな」

寂しさを押さえ込んで笑顔を見せる彼氏。

彼氏「俺、待ってるからさ」

深く頷き笑顔を返す彼女。

彼氏独白「それが、ふたりのあえない交際のはじまりだった」

## ○彼氏の部屋

帰宅してベッドに腰掛ける彼氏。懐から携帯電話と取り出すとメール受信の履歴が表示されている。

彼氏独白「彼女と会えなくなって1週間。以来初めてのメールが届いた——」

[犬と遊んだお(^ω^)]という題名のメールに本文は無し。

彼氏「彼女らしいな」

苦笑する彼氏。本文の無いかわりにメールには携帯電話で撮影した画像（以下[写メ]）が添付されている。画像を開くと小犬とじゃれあう彼女の姿が映っていた。

彼氏独白「そこには、コーギーだかビーグルだかと遊ぶ彼女がいた」

嬉しそうに返事のメールを打つ彼氏。

彼氏メール「楽しそうだな（笑）」

彼女メール「むちゃくちゃ可愛いお(^ω^)」

彼氏メール「君の方が可愛いよ」

彼女メール「いや……そんなことあるお(^ω^)」

彼氏メール「あんのかよ！（爆）」

彼氏独白「——正直彼女と会えないのは辛かったし、その理由すら分からないのは不満だったが、こうやって何かしら繋がってればそれもどうにかこらえられそうな気がしていた」

彼氏メール「また連絡よこせよな」

彼女メール「らじゃ☆」

彼氏独白「——数日後、再び彼女からメールが届いた」

題名は「熊を倒したお（^ω^）」。添付された写メには巨大な熊と戦う彼女の姿が映っている。

彼氏独白「そこには、ヒグマだかつキノワと戦う彼女がいた」

あ然として写メを見つめる彼氏。だがしばらくすると思いついたように苦笑を浮かべる彼氏。

彼氏「よく出来た合成写真（コラ）だなコレ」

すぐさまメールを打ち返す彼氏。

彼氏メール「すごいな。よくやるよこんなの」

彼女メール「結構てこずったお（^ω^）」

彼氏メール「だろうな（笑）」

彼氏独白「だが、彼女の奇妙なメールはなおも続いた」

彼女メール「牛の急所は耳の後ろだお（^ω^）」

渾身の力で猛牛の側頭部に手刀を叩き込む彼女の画像。

彼氏メール「角じゃねーの？」

彼女メール「そこが誤解の元だお（^ω^）」

彼女メール「プロレスでは5秒まで反則が許されるお（^ω^）」

身の丈2メートルはあろうかというプロレスラー相手に、急所蹴りと目潰しを同時に決める彼女の画像。

彼氏メール「えーと……痛いよ？」

彼女メール「私には一生分からん事だお（^ω^）」

彼女メール「黒幕の報復を撃退したお（^ω^）」

武装した大勢のギャングを相手に大立ち回りを演じる彼女の画像。

彼氏メール「なんか写メにストーリーが生まれてきたな……」

彼氏独白「——さすがの俺も閉口した」

うんざりとした表情を浮かべる彼氏。

彼氏独白「そりゃあ確かに最初は面白がっていたさ。でもこうも執

拗にやられると笑えるもんも笑えなくなるってもんじゃないか」

不機嫌な表情のままメールを打つ彼氏。

彼氏メール「悪いけど、こういうのやめてくんないかな？」

携帯電話を閉じてベッドに横たわる彼氏。そのままうとうとし

ていると、ようやくメールが返ってきた。

彼女メール「それは無理だお（´ω`）」

苛立ちの表情を浮かべる彼氏。

彼氏独白「なんでだよ！と返そうと思ったが、結局やめてしまった。

俺は彼女にからかわれているだけなんじゃないかという疑念が頭

をもたげ、つい面倒になってしまったんだ。そうして彼女とのメ

ールは途絶えたまま、あえない日々はひと月に及んだ——」

#### ○日本近海

白昼の海上に大波が巻き起こる。周辺の船舶は次々に転覆し、

その惨状の中心から巨大な怪獣が姿を現す。

大口を開けて咆哮する巨大怪獣。

#### ○彼氏の部屋

特に何をするでもなくベッドの上をごろごろとして過ごしている  
彼氏。

彼氏独白「あれから彼女からは何の連絡も無い。それで平気なのか

と問われればまるで平気じゃないんだけど——」

彼氏「こんなもんなのかな、別れ際って」

部屋の隅ではTV番組の賑やかな音が空しく響き渡っている。

寝返りをうってそちらに目を向ける彼氏。すると、突如番組が

中断されて臨時ニュースが放映されはじめる。

アナウンサー「番組の途中ですが、臨時ニュースをお伝えします。

本日正午すぎ、近海に謎の巨大怪獣が出現しました。怪獣は本土

へ向けて侵攻中の模様です！」

彼氏「ハァア?!」

仰天して身を起こし、TVにかじりつくように見入る彼氏。TV

には確かに巨大な怪獣が映っている。怪獣は港を破壊しながら

上陸し、人々は成すすべも無く逃げ惑うばかりの有様。



アナウンサー「皆さん、速やかに避難を……うわああああ！」

悲鳴とともにアナウンサーが姿を消し、横倒しになったカメラが惨状を映し続ける。

巨大な足でビルを蹴り、家を踏み潰し、口から火を吐き瓦礫を焼き尽くす怪獣。見る間に街並みは廃墟と化し、すでに人の気配は無い。

そこへ彼女が駆けてくる。怪獣の様子を伺いながら携帯電話を取り出し、素早くメールを打つと意を決したように怪獣の前に立ちはだかる。

彼氏「人……女の子？」

ただただ様子を見つめるしかない彼氏の携帯電話にメールが届く。彼女からのものだった。

彼女メール「さよなら」

彼氏はメールとTVとを交互に見比べ、驚愕の表情を浮かべる。

彼氏「……彼女だ」

TVの中の彼女は勇敢に怪獣に立ち向かっていく。自分の10倍、いや20倍はあろうかという巨大な怪獣の蹴りや火炎放射をかいくぐり、蹴りや手刀で懸命に応戦する。携帯を手に呆然とTVを見ている彼氏。

彼氏「本当だったんだ、全部」

怪獣の振り回した尻尾が彼女をとらえる。大きく吹っ飛ばされて地に叩きつけられる彼女。その衝撃で懐から携帯電話がこぼれ落ちる。

彼氏「ああっ！」

彼女の危機を目にして思わず声をあげる彼氏。一心不乱にメールを打ち始める。

彼氏独白「正直言って彼女のことは未だによく分からない。むしろ余計に分からなくなってきたくらいだ。でも分かっていることだ。少し変なけど真っ直ぐな性格。底抜けに明るい笑顔。そして彼女への俺の思い——」

夢中で打ち終えた題名だけのメールを送信する彼氏。

彼氏独白「——届け！」

くの字に倒れ、苦痛に悶絶する彼女。

そんな彼女のもとに彼氏の携帯電話から発信されたメールが届く。這いずりながら落ちた携帯電話を手繰り寄せる彼女。

彼氏メール「ずっと、待ってるから」

短いメッセージを読み終わると、黙って頷き笑顔を浮かべる彼女。全身の力を振り絞って立ち上がると、再び怪獣に立ち向かっていく。

怪獣はゆっくりと彼女に近づいてくる。彼女は猛ダッシュで怪獣に接近し、飛び込むようにして怪獣の腹に頭突きを見舞う。そしてひるむ怪獣を両手で持ち上げると、そのまま高く飛び上がり、みるみるうちに空の彼方へと消えていった。



## 6(終)

---

彼氏独白「それからいくらかの時間が経った。あの事件をマスコミが面白がってとりあげられるくらいには」

ベッドに腰掛けて延々と携帯電話をいじっている彼氏。つけっぱなしのTVの中では、文化人たちがしたり顔で彼女について論じている。

彼氏独白「超人、怪物、ミュータント……偉い人たちは彼女に数々のありふれた名前をつけた。だけど俺にとっては彼女は彼女であって、それ以上でもそれ以下でもない」

彼氏の目から一粒の涙がこぼれおちるが、ぐっと我慢をしている。

彼氏「ずっと待ってるって約束したじゃんか」

不意にチャイムが鳴り玄関のドアを開ける彼氏。そこには彼女の姿があった。呆然とする彼氏に、決まり悪そうにちょこんと手を挙げて挨拶をする彼女。

彼女「ただいま」

彼氏「おかえり……」

立ち尽くす彼氏が手に持った携帯電話がメールの着信を伝える。彼氏がそれをたしかめると、彼女からのメールだった。

彼女メール「今から帰るお(^ω^)」

思わず笑顔をこぼす彼氏。

彼氏「ちょ、メールより先に戻ってくるとか！」

彼女「遅くなってスマン☆」

彼氏「早すぎるくれーだよ」

強い抱擁を交わす彼氏と彼女。

彼氏が取り落とした携帯電話には、倒した怪獣を尻目に地球へと戻っていく彼女の写メが映っていた。

(終)